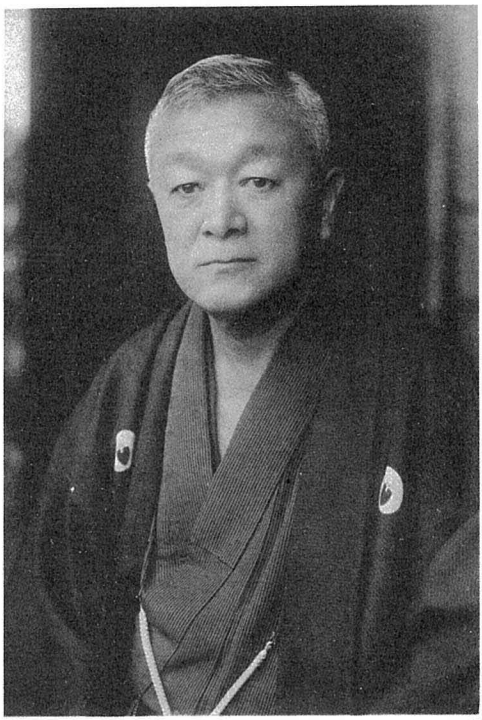
故 文學博士 內藤虎次郎君肖像並筆蹟



滿文藏經の來由

文部省にて西藏文藏經の開版せらるゝに、何時に在りしや、正確なる知り難きも、北清事變の後、北京黃寺の西藏の西藏文藏經が我邦に將來せられ、大學に歸せる頃、帝國の開版なる解題を添せ學博士の墨書白紙紅字(東京大學にて文)に係り、真康熙二十二、三年、續藏(こじ五)

彙報

京都帝國大學名譽教授內藤虎次郎博士訃

昭和九年六月廿六日午後一時五分、本會前評議員として多年斯學の爲に貢獻せられたる帝國學士院會員、京都帝國大學名譽教授、正四位勳一等、文學博士內藤虎次郎氏、宿痾遂に革まり遂に復た起つ能はず、京都府相樂郡瓶原村字口畑の自邸棐仁山莊に於て長逝せらる。哀悼曷んぞ堪へむ。博士字は炳卿、湖南と號し、慶應二年七月十八日を以て秋田縣鹿角郡毛馬內町大字毛馬內に於て舊南部藩儒故內藤調一翁の次男として生誕、明治十六年三月秋田師範學校に入學、同十八年更に同校高等師範科を畢業し、同年九月より秋田縣三等訓導に任ぜられて北秋田郡綴子小學校に在勤せられしが、天稟の偉才夙に青雲の望を懷かれ、同二十年八月潔よく本職を辭された。これ博士が竟に池中のものたらざる最初の首途であつた。之より先、時代の大勢を達觀せられたる博士は、夙に洋學の必要あるを痛感せられ、家學なる支那典籍の學を修むる傍明治十七年十月より同十八年九月まで川名庸謹・關藤成緒、米國人スミスの三氏に就きて英語學を修め、生來の俊敏と非凡の記憶とは人を驚かすに足る成績を擧げ、綴子小學校を辭して二ヶ月、笈を東京に負ひて後は二十三年七月まで滿三年間東京築地居留の英國人サンマース氏及び神田區錦町國民英學會の米國人イーストレーキ氏に師事して更に英語學の學習を繼續し、明治二十三年九月初めて三河國岡崎町に創立せられたる三河新聞の編輯として赴任せしが、大葬俚耳に迎へらるべくもあらず、僅に三ヶ月にして辭職せられた。是より博士は經國の志愈々高く、廿三年十二月より廿六年十一月まで東京にて雜誌『日本人』及び『亞細亞』の編輯に從事し高邁卓絕なる識見を以て眞に社會の木鐸となり、一世を指導する所があつた。同二十七年より大阪朝日新聞社に入社、翌々廿九年迄の二ヶ年間縱橫の靈筆を揮はれ、同卅年臺灣日報社に入り臺灣に在ること八ヶ月、實地見聞する所に基き新領土の臺灣統治に關して獻替する所多し。卅一年歸京して萬朝報社に入りて主筆たりしが、更に卷を懷き筆を載せて滿洲北支那地方より江蘇浙江地方を遊歷し、清國の碩學、一流の政治家と交を結び、將に支那政教の長短表裏を洞察せられた。これ實に明治三十五年十月より翌年一月に亙るの間なりとする、名著『燕山楚水』の成りたるは此の際の事に屬し、此より支那研究を以て生涯の任務と決心せられたるらしい。之より先、卅三年より再び大阪朝日新聞社に入られた。拔群の論說を以て世道人心を誘掖し殊に支那に對する我國朝野の迷妄を醒まし、一管の筆を以て能く五千萬國民の先導者となりし概ありしは此の際の事である。明治卅六年日露の風雲、風正に樓に滿つるの形勢となるや、開戰論を以て天下に呼號し、馬夫走卒と雖も大阪朝日新聞によりて內藤湖南の名を以て博士を知らざる者無きに至つた。卅八年六月外

務省より滿洲軍占領地の行政調査を囑託せられ、同地視察中更に十一月には特命全權大使男爵小村壽太郎氏の招電にて北京に赴き大に盡策する所あり、翌廿九年一月一先づ歸朝、大阪朝日新聞社を辭して同年七月より再び外務省の囑託を受けて韓國及滿洲各地を視察し、其の間に於ける獻言は我が國策に大なる貢獻を爲したのである。此頃の博士は支那問題に關しては論壇既に其の右に出で得る者あらず、明治四十年京都帝國大學文科大學に東洋史學の開設せらるゝや招かれて文科大學の講師となられ、四十二年九月文科大學教授に任ぜられ東洋史第一講座を擔任することと爲つた。偶々文科大學の機關雜誌『藝文』の發刊あり之に登載せられたる『卑彌呼考』の雄篇は其の卓見學界に稀有の衝動を與へ愈々支那學に對する博士の孤詣深造の學、絕世不群の識を發露せられた。四十三年十月總長の推薦によりて文學博士の學位を授けられ、同年七月敦煌文書調査の爲小川琢治、狩野直喜、富岡謙三、濱田耕作四氏と共に清國に差遣せらる。四十四年十二月古社寺保存會々員仰付けられ、其の後四十年二月、同年五月、大正六年十月、同七年九月と四度學術取調の爲支那に出張を命ぜられ、大正十二年十一月廿七日高等官一等に陞叙せられた。同十三年三月歐米各國へ出張を命ぜられ同年七月六日長子乾吉氏を帶同して出發、英佛獨諸國の支那學の碩儒と往來して、我が邦支那學研究の眞價を彼地の學界に知らしめ、傍ら伊太利、埃太利、其の他の諸國を視察して十四年二月三日歸朝、珍稀なる敦煌文書の新資料、太平天國の新資料等夥だしき將來品あり。同年九月朝鮮史編修會顧問仰付けられ、十五年一月十一日には　勅旨によりて帝國學士院會員を仰付けられた。同年華甲の壽たりし爲、同僚知友門下生相謀り博士還曆祝賀會を催し、『內藤博士還曆祝賀支那學論叢』を編集、刊行贈呈以て獻壽の盛事あり、右終りて同八月三十日京都帝國大學の內規により本官を辭職せられ、九月正四位に叙せられた。昭和二年七月には　勅旨によりて京都帝國大學名譽教授の名稱を授けられ、爾來洛南紫仁山莊に在りて我が國に於ける支那學の耆宿として世に重んぜられ、東方文化學院評議員、日滿文化協會理事としても學術の進歩に盡瘁せられたのであるが、昭和九年一月より健康兎角勝れず微熱間斷遂に五月六日吐血して胃潰瘍なること確められ、鍼石の人事を盡して回生の望淡く、遂に六月廿六日午後一時五分を以て自邸に長逝せられたのである。博士の訃を聞てらるゝや、遠近知ると知らざると皆奎星の墜ちたるを悲しみ、我が國學界の大損失として歎くのであつた。蓋し博士の學たるや和漢に亙りて博通源遠、其の識見たるや劃代的に高邁卓絕、他人の追隨を許し門人の模倣を爲さしめざるものであるからである。　朝廷、博士の長逝を哀惜し給ひ祭祀料一封を下賜せられ、特旨を以て勳二等に叙し瑞寶章を授け給ふ。博士の遺志により博士莫逆忘年の知己大島徹水老師導師となり、六月廿七日靈柩を瓶原村より洛東獅子ヶ谷法然院の金毛窟に移し、廿九日午前、法然院の墓域に埋葬、文昭院靜處湖南居士の英靈は天つ神に召されて長へに華藏の寶宮に不歸の旅

につかれたのである。嗚呼呼哀しいかな。埋葬終つて後、法然院本堂にて施餓鬼あり、これ事實上の告別式にして會葬者皆無限の感慨にうたれ、在りし日の溫容の小照に焚香禮拜して一入に涙の袖をしぼつたのである。此時靈前に供へたる、京都帝國大學文學部長、受業生總代等の弔詞は左記の如くである。博士が久しく本會評議員として史學の發達に貢献せられたることは茲に毛語する迄もなく、本誌に寄稿せられたる金玉の名篇は著述目錄にも見ゆる通り其の數は甚だ多い。此等も今は涙を誘ふよすがと爲るのであるが、博士の肉體は朽ちても其の不世出の學德は之を以て永へに支那學界に生くる譯である。博士復た書に長じ、智永を學んで必しも之に拘らず、遠く王羲之に溯る。晩年の筆は書爽の堂奥に入られ、枯淡の筆勢、天下の名筆として其の斷簡零墨と雖も世人爭ひて之を珍重せしは人の知悉する所、更めて特筆する迄もなからう。茲に博士の略歷及び終焉の大梗を叙し、謹みて哀悼の微忱を披瀝する。〔那波利貞謹記〕

弔　詞

維昭和九年六月廿九日內藤博士寔麥ノ事已ニ了リ重ネテ席ヲ東山ノ法然院ニ設ケ虔ミテ佛事ヲ修メ以テ冥福ヲ禱ル來リ會スルモノ皆博士友好ノ士及門受業ノ徒梵唄ヲ聽イテ哀ヲ增シ遺像ヲ拜シテ痛ヲ深クス嗚呼哀哉博士絕特ノ資ヲ以テ稽古ノ功ヲ積ミ博ク經史ヲ綜ヘ百氏ヲ貫穿シ其學汪洋トシテ際涯ヲ知ルコトナク詞章ノ美翰墨ノ妙一代ニ卓越セシハ中外ノ周ク知ルトコロ今必スシモ稱說セス顧フニ博士ノ職ヲ我大學ニ奉シ東洋史ノ講席ヲ掌ルコト十有七年其諸生ニ教フル績ヲ探リ幾ヲ研キ原々本々前人ノ未タ言ハサルノ祕ヲ發シ後生ノ宜シク由ルヘキノ徑ヲ示ス諸生一義ノ曉ル能ハサルモノアリ一事ノ知ラサルモノアル時ハ輙チ其蘊蓄ヲ傾ケ手畫キ口誦シ其領會スルヲ待チテ然ル後止ム平生能ク人ノ長ヲ揭ケ其短ヲ掩ヒ弘奬誘掖神ヲ勞スルヲ厭ハス是ヲ以テ諸生悅服シテ仰ヒテ大師トナセリ博士精力人ニ過キ氣體康强已ニ官ヲ辭シテヨリ跡ヲ山林ニ屏ケ老ニ至リテ研學怠ラス夙ニ心ヲ前淸ノ史事ニ留メ興廢治亂ノ故ニ於テ本ヲ探リ末ヲ究メ著ハシテ成書アリ名山ノ業將ニ彌々多カラムトスルニ當リ天壽ヲ假サス溘焉トシテ館ヲ捐ツ德音ノ永ク絕エルヲ悲ミ高義ノ忘レ難キヲ思ヲ聊カ鄙懷ヲ述ヘテ謹ミテ博士ノ靈ニ告ク嗚呼悲哉尙饗

昭和九年六月二十九日　京都帝國大學文學部長　羽田　亨

維レ昭和九年歲次甲戌六月二十六日內藤湖南先生溘焉トシテ長逝セラル碩果凋零シテ風流ノ頓ニ盡クルヲ愴ミ泰山其レ頹レテ杖履ノ追ヒ難キヲ恨ム嗚呼哀シイ哉先生東洋史學ノ巨擘ヲ以テ講席ヲ京都帝國大學ニ掌ルコト二十年源流ヲ探尋シテ利叉廝ヲ斬チ隱微ヲ掩抉シテ祕奧悉ク燭ス其後進ヲ栽培スル寸長モ必ス擧ケテ及ハサルヲ恐ルルカ如ク斯文ヲ扶翼スル四科並ニ進メテ輕スル所ナシ譬ヘハ百川ノ海ニ朝シテ萬流盡ク仰クカ如ク、譬ヘハ雨露ノ壤ヲ霑シテ草木ノ榮ニ向フカ如シ亭亭タル師表之

ヲ瞻レハ彌々高ク濟濟タル儒術罷メント欲シテ能ハス既ニ休ヲ告クルノ後モ虛シクシテ往キ實チテ歸ルモノ項背相屬ミ緯ヲ執リ義ヲ問フモノ叩クニ任セテ咸ク鳴ル人人廬室ヲ營ミテ旁ニ休止シ駑鈍ヲ竭シテ一體ヲ窺ハント希ハサルハナシ何ソ料ラン天上ノ白王自ラ鴻才ヲ須ヒ地下ノ修文忽チ郎選ニ逢フ嗚呼哀シイ哉蓋等侍ク受業ノ末ニ厠ハリ欷歔相從ヒテ泉室ノ永ニ閟ツルヲ悼ミ鑿香謹ミテ獻シ靈旗ニ託シテ哀ヲ叙フ伏シテ惟フニ尙クハ饗ケヨ

昭和九年六月二十九日

受業總代　有高　巖

故內藤博士略歷

慶應二年七月十八日　秋田縣鹿角郡毛馬內町大字毛馬內ニ生ル

明治十六年三月　秋田師範學校入學

同　十八年　同校高等師範科卒業

明治十七年十月ヨリ同十八年九月マデ川名庸謹、關藤成緒、米國人スミス氏等ニ就キ英語學ヲ修ム

同　年九月　秋田縣三等訓導ニ任ゼラレ北秋田郡綴子小學校在勤ヲ命ゼラル

同　二十年八月　依願本職ヲ免ズ

明治二十年十月ヨリ同二十三年七月マデ東京築地居留英人サンマース氏及神田錦町國民英學會米人イーストレーキ氏ニ就キ英語學ヲ修ム

明治二十三年九月ヨリ同十一月マデ三河國岡崎町ニ創立セル三河新聞ノ編輯ニ從事ス

明治廿五年十月ヨリ同廿六年一月マデ滿洲北淸及ビ江浙各地ヲ遊歷ス

明治廿八年六月外務省ヨリ滿洲軍占領地行政調査ノ囑託ヲ受ケ同地方視察中同年十一月特命全權大使男爵小村壽太郎氏ヨリ招電ニヨリ北京ニ赴キ同廿九年一月歸朝ス

明治廿九年七月外務省ノ囑託ヲ受ケ韓國滿洲各地ヲ視察シ同年十一月歸朝ス

同四十年十月十六日　京都帝國大學文科大學講師ヲ囑託セラル

同　年十月廿六日　東洋史學講座擔任ヲ囑託セラル

同四十二年九月十五日　任京都帝國大學文科大學教授叙高等官六等

東洋史學第一講座擔任ヲ命ズ

同　年十二月廿日　叙正七位

同四十三年七月四日　御用有之淸國ヘ被差遣

同　年十月七日　京都帝國大學總長ノ推薦ニ基キ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ文學博士ノ學位ヲ授ケラル

同四十四年九月廿三日　陞叙高等官五等
同　年十二月八日　古社寺保存會委員被仰付
同　年十二月十一日　叙從六位
同四十五年二月廿九日　清國ヘ出張被仰付
同　年五月　學術研究ノ爲清國奉天ヘ出張ヲ命ゼラル
大正二年十月七日　陞叙高等官四等
同　年十二月十日　叙正六位
同　四年四月廿四日　御大典賀表起稿委員ヲ囑託セラル
同　年十一月十三日　陞叙高等官三等
同　年十二月廿八日　叙從五位
同　五年二月七日　立太子式賀表起稿委員ヲ囑託セラル
同　六年十月廿日　支那ヘ出張被仰付
同　年十月廿一日　出發
同年大十二月廿四日　歸朝
同　七年九月廿七日　支那ヘ出張被仰付
同　年十月一日　出發
同　年十月十六日　歸朝
同　年十一月廿一日　陞叙高等官二等
同　八年一月廿日　叙正五位
同　年三月廿四日　東宮御成年式賀表並賀箋起稿委員ヲ囑託セラル
同　十年五月廿一日　叙勲四等授瑞寶章
同十二年十一月廿七日　陞叙高等官一等
同十三年二月十五日　叙從四位
同　年二月廿三日　叙勲三等授瑞寶章
同　年三月廿九日　歐米各國ヘ出張ヲ命ゼラル
同　年七月六日　出發
同十四年二月三日　歸朝
同　年九月廿二日　朝鮮史編修會顧問被仰付
同十五年一月十一日　帝國學士院規定第二號ニ依リ　勅旨ヲ以テ帝國學士院會員被仰付
同　年八月三十日　依願免本官
同　年九月十五日　叙正四位　特旨ヲ以テ位一級被進
昭和二年四月十一日　京都帝國大學文學部講師ヲ囑託セラル
同　年七月十六日　帝國大學令第十三條ニ依リ　勅旨ヲ以テ京都帝國大學名譽教授ノ名稱ヲ授ケラル
同五年十一月十五日　京都帝國大學文學部講師ノ囑託ヲ解カル
同　九年六月廿六日　叙勲二等授瑞寶章
同　年同月同日　逝去

内藤博士著述目錄

〔書名〕	〔發行年月日〕
單行本	
近世文學史論	明治三十年一月十日
諸葛武侯	明治三十年六月十二日

淚珠唾珠　明治三十年六月廿八日
燕山楚水　明治三十三年六月三十日
滿洲寫眞帖　明治四十一年六月四日
清朝衰亡論　明治四十五年三月十三日
支那論　大正三年三月二十三日
清朝書畫譜　大正五年七月二十日
寶左傳文　大正十二年十二月
日本文化史研究　大正十三年九月五日
新支那論　大正十三年九月二十三日
航歐集　大正十五年九月
玉石雜陳　昭和三年春
研幾小錄（一名支那學叢考）　昭和三年四月一日
讀史叢錄　昭和四年八月八日
增訂日本文化史研究　昭和五年十月
新制中等東洋史（甲乙二種）　昭和六年十月三十日
中等漢文（全五册）　昭和六年九月三十日
中學漢文（全五册）　昭和七年十月十二日

單篇文

〔題目〕	〔掲載書名〕	〔著作年月日〕
（讀）明東北疆域辨誤（附庫葉島）	歷史と地理一ノ四、五	明治三十三年六月、七月
清朝創業時代の財政	太陽六ノ九	明治三十三年七月
蟲魚談	大阪朝日新聞	明治三十三年十月二十九日
野籟居讀書記	日本人一一九	明治三十四年一月
讀書偶筆	日本新聞	明治三十四年一月二日
城西讀書記	日本人一三〇	明治三十四年三月
清朝興衰の關鍵	太陽七ノ三	明治三十四年三月
讀書記三則	日本人一四四	明治三十四年八月
唐以前の畫論	國華一四一	明治三十五年二月
蒙文元朝秘史	大阪朝日新聞	明治三十五年二月三日
蒙文元朝秘史	史學雜誌十三ノ三	明治三十五年三月
奉天宮殿にて見たる圖書	早稻田文學六	明治三十九年六月
興善化瞿尙書	代大谷伯光瑞	明治四十年二月
那珂博士成吉思汗實錄	大阪朝日新聞	明治四十年四月二十八日
日本滿洲交通略說	叡山講演集	明治四十年十一月
報清國胡欽差	代大谷伯光瑞	明治四十一年十二月
德島一瞥	大阪朝日新聞	明治四十二年八月廿一日—九月三日
敦煌發掘の古書	大阪朝日新聞	明治四十二年十一月二十四—二十七日
（寶）高橋陸二先生贊		明治四十二年
東洋史學の現狀	大阪朝日新聞	明治四十三年一月八—九日
（讀）卑彌呼考	藝文一ノ二・三・四	明治四十三年五—七月
寶大唐三藏玄奘法師表啓跋		明治四十三年六月
西本願寺の發掘物	大阪朝日新聞	明治四十三年八月三—六日
（寶）上野氏藏唐鈔王勃集殘卷跋		明治四十三年八月
（讀）隼人石と十二支神象に就て	歷史地理一七ノ二	明治四十四年二月

明治四十三年九月京都帝國大學文科大學清國派遣教授學術視察報告（狩野小川濱田富岡諸氏ト〻作）　大阪朝日新聞　明治四十四年二月

日韓の開闢說　大阪朝日新聞　明治四十四年三月六—九日

北派の書論　大阪朝日新聞　明治四十四年三月廿六日

（讀）新羅眞興王巡境碑考　藝文二ノ四　明治四十四年四月

（讀）倭面土國　藝文二ノ六　明治四十四年六月

神田氏藏古鈔王勃集殘卷跋　明治四十四年八月廿四日

天香閣印存序　明治四十四年九月

（日）朝鮮攻守の形勢　朝日講演集（一）　明治四十四年十一月

支那史の價値　朝日講演集（一）　同

支那學問の近狀　朝日講演集（一）　同

（讀）清朝姓氏考　藝文三ノ三　明治四十五年三月

上虞羅氏藏北宋拓聖教序跋　明治四十五年四月十七日

（讀）清朝姓氏考正誤　藝文三ノ四　明治四十五年四月

（寶）書孫幼穀壽言册後　明治四十五年四月

（日）弘法大師の文藝　明治四十五年六月十五日

（讀）清朝開國期の史料　藝文三ノ一一、一二　大正元年十一—十二月

小川氏藏二體千字文跋　大正元年十二月十日

景宋蘭劉夢得集序　大正二年八月

（讀）蒙古開國の傳說　藝文四ノ一二　大正二年十二月

（寶）唐鄭桓及夫人崔氏墓志跋　大正二年十二月

朝鮮平安南道龍岡郡新出土漢碑釋文　藝文五ノ三　大正三年三月

（讀）堯典の歌永言聲依永の二言に就きて　藝文五ノ九　大正三年九月

（寶）耶馬溪圖卷跋　大正三年十二月

清朝畫の話（談話筆記）藝文六ノ一　大正四年一月

（寶）神田氏藏古鈔「尙畫」跋　大正四年二月

小野毛人墓碑　大正四年三月

滿洲發達史序　大正四年四月二十九日

美術家としての光琳　大阪毎日新聞　大正四年五月三十日

賀大正天皇卽位表　代井上京都市長密　大正四年十一月十日

（讀）高昌國の紀年に就て藝文六ノ一一　大正四年十一月

（寶）山城國愛宕郡高野村崇道神社之碑　大正四年十一月

（讀）禮部志稿解題　史林一ノ一　大正五年一月

九州古墳瞥見　大阪毎日新聞　大正五年一月廿日—廿一日

（研）支那に於ける史の起源　大正五年四月

支那時局私見　外交時報二七七　大正五年五月

（寶）清朝書畫譜序　大正五年六月

袁氏の失敗より得べき教訓　外交時報二八一　大正五年七月

古代の支那貿易と絹織物　西陣二ノ七・八　大正五年七月

（寶）新印南宗論語序　大正五年七月

（讀）王亥　藝文七ノ七　大正五年七月

清朝の繪畫　大阪朝日新聞　大正五年八月八—十九日

賀册立皇太子表　代荒木京都帝國大學總長寅三郎　大正五年十一月

（讀）憲臺通紀考證　史林二ノ一　大正六年一月

支那上古の社會狀態　朝日講演集(二)　大正六年一月二十六日
(研)支那古典學ハ研究法に就きて　東方時論二ノ二　大正六年二月
片岡大來君室光田氏墓碣銘　大正六年二月
(寶)有竹齋藏隷印序　大正六年四月
「華夷譯語」の發見　大阪毎日新聞　大正六年六月十三日
支那動亂鄙見　外交時報三〇四　大正六年六月
(讀)綴玉亥　藝文八ノ八　大正六年八月
西都原古墳調査報告(今西博士ト合作)大正七年三月
內藤氏女早苗子壙志　大正七年三月
支那を悲觀し併せて我國論を悲觀す　外交時報三二三　大正七年五月
根本的對支政策　外交時報三二五　大正七年六月
(寶)大正開氣集題詞　大正七年六月
(讀)秦邊紀略の嘎爾旦傳　史林三ノ三　大正七年六月
(日)聖德太子の內治外交　歷史と地理二ノ一　大正七年七月
(寶)岩崎男藏古鈔尙書跋　大正七年九月
鑑燧說　大阪毎日新聞　大正七年九月十日
近日の南北妥協論　外交時報三三八　大正七年十月
(日)日本上古の狀態　歷史と地理三ノ二　大正八年二月
京都府史蹟勝地調査會報告第一册序　大正八年三月
滿蒙叢書序　滿蒙叢書(一)　大正八年三月
口北三廳志解題　滿蒙叢書　一)　大正八年三月
東北亞細亞諸國開闢傳說　民族と歷史一ノ四　大正八年四月
賀皇太子成年式表　代荒木京都帝國大學總長寅三郎　大正八年五月
支那の通貨としての銀　朝日講演集(四)　大正八年五月
支那經濟上の革命　大阪朝日新聞　大正八年八月三十日—九月十一日
北征錄、北征後錄解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
北征記事解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
伏戎記事解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
松亭行紀、塞北小鈔解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
奉使俄羅斯行程錄解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
出塞紀略解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
西征紀略解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
從西紀略解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
奉使三音諾彥記程草、塞上吟解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
張家口至烏里雅蘇臺竹枝詞解題　滿蒙叢書(二)　大正八年九月
(讀)再び秦邊紀略に就て　史林四ノ四　大正八年十月
(寶)瘞鶴銘　大正八年十月
(寶)容安軒舊書四種序　大正八年十月
日本古建築菁華序　大正八年十月
(寶)正倉院本王勃集殘卷跋　大正八年十一月
支那の排日論　外交時報三五四　大正八年十一月
內田君の家學淵源　藝文一〇ノ一二　大正八年十二月
四王吳惲序　大正八年

(讀)地理學家朱思本　藝文一一ノ一、二　大正九年一—二月
元末の四大畫家　歷史と地理　大正九年一月
古鏡の研究序　大正九年二月
近獲の二三史料　藝文一一ノ三　大正九年三月
東三省蒙務公牘彙編解題　滿蒙叢書(四)　大正九年三月
庫倫蒙俄下倫對照表解題　滿蒙叢書(四)　大正九年三月
阿部氏藏梁楷筆十六應眞圖卷跋　大正九年六月
(寶)吳竹庵記　大正九年八月
久津川古墳研究序　大正九年九月
(讀)都爾鼻考　史林五ノ四　大正九年十月
(寶)記古學　大正九年十月
(日)平安朝時代の漢文學　歷史と地理六ノ四　大正九年十一月
(日)近畿地方に於ける神社　京阪文化史論　大正九年十一月
(研)章實齋先生年譜　支那學一ノ三、四　大正九年十一—十二月
日本の肖像畫と時代の影響　大阪毎日新聞　大正九年十二月十二日
滿蒙叢書(九)　大正十年一月
(讀)續王玄　藝文一二ノ二・四　大正十年二、四月
(研)富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷　支那學一ノ六　十年二月
(研)尙書編次考　支那學一ノ七　大正十年三月
有竹齋藏淸六大家畫譜序　大正十年三月
(日)日本の肖像畫と鎌倉時代　歷史と地理七ノ五　大正十年五月
日本の肖像畫と鎌倉時代の研究　大正十四年十月
龍沙紀略解題　滿蒙叢書(五)　大正十年五月
黑龍江外記解題　滿蒙叢書(五)　大正十年五月
黑龍江述略解題　滿蒙叢書(五)　大正十年五月
卜魁城賦解題　滿蒙叢書(五)　大正十年五月
蘇蒙芻議解題　滿蒙叢書(五)　大正十年五月
石川丈山　大阪毎日新聞　大正十年六月十二日
(寶)景正德本三國遺事序　大正十年七月
(研)營造方式の新印本　支那學一ノ一〇　大正十年六月
(研)盛伯義祭酒　支那學一ノ一一　大正十年七月
女眞民族の同源傳說　民俗と歷史六ノ一　大正十年七月
(寶)秋田縣鹿角郡毛馬內町征露役忠魂碑記　大正十年八月
(寶)蘭藹居士大內先生碑銘　大正十年九月
殷虛に就て　考古學雜誌一二ノ一　大正十年九月
(日)大阪の町人と學問　大阪毎日新聞　大正十年九月二十六—二十九日
(研)爾雅の新研究　支那學二ノ一、二　大正十年九—十月
柯氏の新元史の價値　大阪毎日新聞　大正十年十月二十三日
(寶)聖武天皇宸翰雜集跋　大正十年十月
(研)聖武天皇宸翰雜集　支那學二ノ三　大正十年十一月
(寶)富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷跋　大正十年十二月
有竹齋古玉譜序　大正十年
(讀)淸朝初期の繼嗣問題　史林七ノ一　大正十一年一月
概括的唐宋時代觀　歷史と地理九ノ一　大正十一年一月

(日)日本文化とは何ぞや　大阪朝日新聞　大正十一年一月五—七日
(研)禹貢製作の時代　東亞經濟研究六ノ一　大正十一年二月
藤井氏藏東坡尺牘跋　大正十一年二月
(寶)舊鈔本翰苑跋　大正十一年三月
(研)舊鈔本翰苑に就て　支那學二ノ八　大正十一年四月
四庫全書に就て　サンデー毎日　大正十一年四月十二日
(研)胡適君の新著章實齋年譜を讀む　支那學二ノ九　大正十一年五月
現代藝術に於ける南畫　太陽二八ノ九　大正十一年七月
(研)盛伯羲遺事　支那學二ノ一　大正十一年七月
(日)我雜新史上遺す可らざる資料　大阪毎日新聞　大正十一年八月六—八日
(寶)杜家立成雜書要略跋　大正十一年八月
(研)正倉院章藏二舊鈔本に就て　支那學三ノ一　大正十一年十月
本居宣長稿本全集第一輯を讀む(那波利貞氏ト合作)　藝文一四ノ二　大正十二年二月
(日)日本文化の獨立　歷史と地理一二ノ一　大正十二年七月
(日)應仁の亂に就て　室町時代の研究　大正十二年十月
(研)易疑　支那學三ノ七　大正十二年十二月
(寶)寶左齋文跋　大正十二年秋
(讀)燒失せる宗滿文藏經　藝文一五ノ三、六　大正十二年三—六月
霽霞莊印譜序　支那學三ノ一二　大正十三年五月
古鈔本南海寄歸內法傳序　大正十三年六月
景印翁之文序　大正十三年六月
海華堂印賞序　支那學三ノ一〇　大正十三年六月
富永仲基の佛教研究法　龍谷大學論叢二五六　大正十三年六月
(紹)與伯希和翰林　大正十三年九月廿八日
(紹)與董綬金司農　大正十三年十月
(紹)書陳楓階藏書歸里圖後　大正十三年十二月
白石の一遺聞に就て　歷史と地理一五ノ五　大正十四年五月
染織に關する文獻の研究　古代織物一　大正十四年五月
百代艸序　大正十四年六月
(讀)大英博物館所藏太平天國史料　史林一〇ノ三　大正十四年七月
大阪の町人學者富永仲基　大阪文化史　大正十四年八月
唐朝の文化と天平文化　佛教美術五　大正十四年十二月
(讀)樂浪遺蹟出土の漆器銘文　藝文一五ノ一　大正十五年一月
西洋文明と東洋文化　大阪毎日新聞　大正十五年一月三—八日
二大珍書の出現「說文と不空表制集」　サンデー毎日　大正十五年三月廿一日
(讀)再び樂浪遺蹟出土の漆器銘文に就きて　藝文一五ノ四　大正十五年四月
「西湖より包頭まで」序　大正十五年四月
學問の向上とコレージュ・ド・フランスの特徵　大阪朝日新聞　大正十五年四月二—五日

宋拓晉唐小楷跋　大正十五年五月
珍本「南都賦」　サンデ毎日　大正十五年五月十六日
歐洲にて見たる東洋學資料　新生一ノ一　大正十五年五月
密教板畫集成序　大正十五年五月
漢以前の繪畫（支那繪畫史講話一）　佛教美術六　大正十五年五月
支那に還れ――新々支那の一傾向　大阪毎日新聞　大正十五年五月廿五―廿日
（研）宋樂と朝鮮樂との關係　支那學四ノ一　大正十五年七月
六朝の繪畫（支那繪畫史講話二）佛教美術七　大正十五年十月廿五日
敬首和尚の典籍研究　典籍の研究五　大正十五年十月廿五日
敦煌本大無量壽經序　大正十五年十月
泉屋清賞續編序　大正十五年十二月十四日
唐朝の繪畫（上）（支那繪畫史講話三）　佛教美術九　昭和元年十二月
思ひ出話　大阪朝日新聞　昭和二年一月三―七日
「土俗學上より見たる蒙古」序　昭和二年一月
「銅鐸の研究」序　昭和二年二月
擬策一道　狩野博士還曆記念支那學論叢　昭和二年三月
（訂）古寫本日本書紀に就て　昭和二年四月
紹衣藁鈔跋　昭和二年四月
宋版禮記正義に就て　書物禮讃六　昭和二年四月三十日
山梨稲川の學問　山梨稲川全集四　昭和二年五月
王國維を悼む　大阪毎日新聞　昭和二年六月十七日
建保古寫本萬葉集　サンデー毎日　昭和二年六月廿六日
（訂）日本風景論　大阪毎日新聞　昭和二年七月十三―十九日
沈石田齋魯勝蹟圖跋　昭和二年九月二十九日
（研）拉薩の唐蕃會盟碑　昭和三年二月三日
玉石雜陳引　昭和三年春
景印舊鈔本禮記疏殘卷跋　昭和三年二月
寛政時代の藏書家市橋下總守（大阪府立圖書館長今井貫一氏記念講演集）　昭和三年五月二十日
唐朝の繪畫（下）（支那繪畫史講話四）　佛教美術一一　昭和三年五月二十二日
東洋天文學史序　昭和三年七月
文學博士西村君墓表　昭和三年七月
奈良朝文化と書籍　寧樂一〇　昭和三年八月
近代支那の文化生活　支那一九ノ一〇　昭和三年十月一日
（訂）唐代の文化と天平の文化　昭和三年十月五日
賀今上天皇卽位式表　代關大阪市長一　昭和三年十一月
周公彝釋文　高瀨博士還曆記念支那學論叢　昭和三年十二月十六日
（讀）三たび秦逖紀紀略に就て　昭和四年三月
奉天宮殿書庫書目　襄文二〇ノ八　昭和四年四月
尺度綜考序　昭和四年四月
謝巡幸表　代關大阪市長一　昭和四年五月
讀碑札記の中より　支那學五ノ二　昭和四年五月
莊子解跋　南部叢書　昭和四年六月

(訂)飛鳥朝の支那文化輸入に就きて　佛教美術一三　昭和四年六月十五日
櫻寧村舍詩序　昭和四年七月
(訂)日本國民の文化的素質　日本及日本人一八三、一八四　昭和四年八月、九月
影印祕府寮藏宋槧單疏本尙書正義解題及尙書正義撰者考刊者考　支那學五ノ三　昭和四年八月
影印宋槧單疏本尙書正義跋　昭和四年八月
朝鮮安堅の夢遊桃源圖　東洋美術三　昭和四年九月五日
五代の繪畫(支那繪畫史講話五)佛教美術一四　昭和四年九月三十日
敕板集影跋　昭和四年九月
(訂)香の木所に就て　德雲創刊號　昭和四年十一月十日
正倉院の書道　東洋美術(正倉院の研究)昭和四年十一月廿五日
藤井氏藏唐鈔左傳殘卷跋　昭和四年十二月
信貴山朝護孫子寺樓大僧正惠照和上銅像銘　昭和四年十二月
爽籟館欣賞序　昭和四年十二月
北宋の畫家及畫論(支那繪畫史講話六)　佛教美術一五　昭和五年一月廿五日
通典の著者杜佑　龍谷大學論叢二八九　昭和五年一月
(訂)日本文化の獨立と普通教育　昭和五年三月
故朝鮮總督府政務總監池上君墓碑　昭和五年四月
賈魏公年譜　小川博士還曆記念史學地理學論叢　昭和五年五月
景印宋槧思溪圓覺禪師藏經目錄跋　昭和五年六月
南宋の繪畫及畫論(支那繪畫史講話七)　佛教美術　昭和五年六月
白鶴帖序　支那學六ノ一　昭和五年八月
武居氏藏晉鈔本三國志殘卷跋　昭和五年八月
鳳岡存稿序　昭和五年十月
章學誠の史學　懷德八　昭和五年十月
日本美術史序　東洋美術特輯　昭和五年十一月
元代の繪畫(支那繪畫史講話八)佛教美術一七　昭和五年十一月
再び香の木所に就て　德雲二ノ一　昭和五年十一月
宋元版の話　昭和五年十二月
昭和六年一月二十六日御講書始　昭和六年一月廿六日
漢書進講案　支那學六ノ二
三井寺所藏の過所に就て　桑原博士還曆記念東洋史論叢　昭和六年一月
空海の書法　書道全集一一　昭和六年七月十八日
智證大師關係の文牘と其の書法　昭和六年十一月
園城寺の研究　昭和六年十二月廿四日
朝彥親王の御事ども　大阪每日新聞　昭和六年十二月十八日
山陽遺墨集序
明代の繪畫—その初期(支那繪畫史講話九)　佛教美術一八　昭和六年十二月
故衆議院議員榊田君碑銘並序　昭和六年十二月
慈雲尊者の學問　慈雲尊者讃仰會講演集三　昭和六年十二月

滿洲國の建設に就て　大阪毎日新聞　昭和七年三月一—八日
閻立本古帝王圖卷跋　昭和七年三月
景印古鈔五行大義跋　昭和七年五月
高野板之研究序　昭和七年五月廿六日
魏晋南北朝通史序　昭和七年九月十日
山崎闇齋先生の學問　大阪毎日新聞　昭和七年十月十五日
「帝王略論」の發見　東京日日新聞　昭和七年十月二十日
擬策一道　支那學六ノ四　昭和七年十二月
書重印新撰字鏡後　支那學七ノ一　昭和八年二月
支那古銅精華序　支那學七ノ一　昭和八年二月
紙のはなし　工藝二八　昭和八年四月
安達氏藏王右軍遊目帖跋　昭和八年六月
滿洲國今後の方針に就て　大亞細亞一ノ三　昭和八年七月
支那歴史的思想の起源　史林一九ノ一　昭和九年一月
滿洲國の建設に際して　大阪毎日新聞　昭和九年一月二十日
百濟史研究序　昭和九年三月
刪訂泉屋清賞序　昭和九年四月

題目右肩の符號(讀)は讀史叢錄に、(研)は研叢小錄、(日)は日本文化史研究、(訂)は訂增日本文化史研究、(寶)は寶左齋文、(航)は航歐集に收められたるを示すものである。

○渤海東京城發掘

昨年の繼續事業として第二回渤海東京城發掘團は東京帝國大學原田淑人助教授を主班とし、助手駒井和愛氏、帝室博物館矢島恭介氏、滿蒙文化研究所三上次男氏、東京文化學院京都研究所小野清一氏が參加、東亞考古學會幹事島村孝三郎氏とともに渡滿し、五月二十日より六月十九日まで一ヶ月間東京城の發掘に從事した。なほ發掘の前半には滿洲國文教部古蹟保存會王興義氏、後半には大連工業專門學校教授村田治郎氏の參加を見た發掘は寧安領事館警察署と東京城に駐屯する獨立守備隊及び東京城自警團の保護の下に行はれ、折柄の天候の不順にはゞまれながら、宮城内の一部(昨年殘したところの宮址V・VI、及び各宮殿間の廊下)、禁苑内の宮址・八角址二、及び皇城の門址を發掘した。宮址Vは宮址に接續し、その廊下を含む各柱には綠釉の柱座があり、特に宮Vの正面のものに蓮瓣の捺出しがあつた。宮址Vは王の日常起居する宮殿であつたらしく、その西にある宮址とともに炕の迹が發見されまた和銅開寶が發見された。瓦當・文塼の完好なるもの昨年よりも多く、綠釉蓮瓣・綠釉龍頭など短片ながらその全貌を復原するに足るものがあり、また石彫龍頭は金鑾殿址正面より相並んで三個出土した。これによつて金鑾殿正面の柱毎に一個づゝ取付けられてゐたことがほゞ明らかになつた。なほ一日、三靈屯にある渤海王陵の調査が行はれ、切石で作られた石墓の上に礎石列・瓦片を發見し、墳墓の上に建築物があり、更にその前に前殿、もしくは門と稱すべきものあ

ることを發見した。

因みに、本發掘は今年度にて一先づ切上げ、遺物は東京帝國大學にて整理し、報告書の作成にかゝる由。（水野）

民俗學會

五月例會　五月廿八日午後七時より樂友會館に於いて開催、左の講演あり。

山村調査に就いて　柳田國男氏

民俗學上より隔絶せる山村の調査の意義及び其方法を述べらる

奄美十島見學談　三宅宗悅氏

先般行はれたる十島調査團の一員として見聞せられし興味多き風俗に就いて語る

種子島に就いて　鮫島麟晉郎氏

西田教授以下四拾人參會、盛會裡に十時半閉會（湯淺）

會報

◉會員動靜

轉居

京城府東山崇洞一官舍八號　大谷勝眞氏
大阪府三島郡高槻町本行寺　服部英珠氏
東京市淀橋區下落合四丁目二一〇八　川上多助氏
東京市小石川區竹早町一二四　有高巖氏
愛知縣丹羽郡布袋町　丹羽高等女學校　山內嘉夫氏

退會

川崎正男氏

◉寄贈交換圖書目錄

朝鮮史　第三編　第四、五卷　第四編第二卷
第五編　第二、三、四卷　朝鮮史編修會
朝鮮史史料叢刊
第二　海東諸國紀（一帙一册）
第三　軍門謄錄（一帙一册）
第四　唐將書帖、唐將詩畫帖
景印豐山柳氏家藏原本原書帖（一帙四册）　朝鮮史編修會　著
中村直勝著　天皇と國史の進展　著者

北村壽四郎著　世界の平和を謀る井伊大老とハリス　著者
國史教授資料、第五輯　名古屋溫故會
史學雜誌　四五の七、八、九　史學會
歷史地理　六四の一、二、三　日本歷史地理學會
史學　一三の二　三田史學會
史淵　九（二册）　九大史學會
史學研究　六の一　廣島史學研究會
靑丘學叢　一六　靑丘學會
社會經濟史學　四の三、四、五、六　社會經濟史學會
人類學雜誌　四九の六、七、八、第一、二附錄　東京人類學會
考古學雜誌　二四の六、七、八　考古學會
文化　一の六、七、八、九　東北帝大文科會
西洋史研究　第五輯　東北帝大西洋史研究會
史迹と美術　四四、四五、四六　史迹美術同攷會
國史學　一九　國史學會
國民精神文化研究　第一年第四册　國民精神文化研究所
國學院雜誌　四〇の七、八、九　國學院大學
經濟論叢　三九の一、二、三　京都帝大經濟學會
信濃　三の六、七、八　信濃鄉土研究會
皇學　二の二　神宮皇學館館友會
社會學徒　八の七、八、九　社會學徒社
地理學年報　第二卷　東京文理大地理學年報編輯所
眞宗學報　一四　眞宗專門學校出版部
長崎談叢　一四　長崎史談會
日本文化　一　天理圖書館
商業と經濟　一五の一　長崎高商研究館
T'oung Pao（通報）XXIV, 4,5; XXXI, 1-5; XXXII, 1,2 P. Pelliot